北越雪譜

二編 夏

ル 4
6319
5

東京市立圖書館

北越雪譜二編 巻二目録

○雪頽よ熊を得る
○雪中の葬式
○芭蕉翁ゞ遺墨
○たせ我の容貞
○亀の化石
○餅花
○斉の神祭事
○煉羊羹の起立
○雪頽の難
○龍燈
○芭蕉略傳
○化石溪
○夜光の玉
○斉の神勧進
○天麩羅の始原
○雪中の狼

通計十六條

荻野蔵

98-64

本舗近刻

○骨董集三編二巻 四編二巻

右醒齋京傳先生遺稿京山人百樹翁補訂

○和漢印章考三巻　仝

○女挺考前後六巻　仝

故昏ハ上古より近古ハ至るまゝ〳〵古図を載古昏を引て説を下し女の風俗ハ係りたる事ハ包羅輯載して餘こゝ〳〵且国字の昏ハ婦人乙夜の覧ハ供すゝ〳〵蓋茲本編雪譜の餘帋爰ハ有を以姑近刻二家の著目を挙伏請

雲顧の諸賢刊ハ先るの竈評是祈

江戸　書賈　文溪堂　謹白

北越雪譜二編　巻二

北越　鈴木牧之　編選

江戸　京山人百樹　増修

○雪類ハ熊を得

酉陽雑俎ハ云熊膽春ハ首ハ在り夏ハ腹ハ在り秋ハ左の足ハ在り冬ハ右の足ハ在りとゝ〳〵ハ余試ハ猟師ハ問ハ熊の膽ハ常ハ腹ハ在て四時同〳〵とゝ〳〵り蓋漢土の熊ハ酉陽雑俎の説のごとくハやハ凡猟師山ハ入りて第一ハ欲る処の物熊なり一熊を得ハ其の皮と其の膽と大ハ小ハ共ハ金五両ハ上ハ出るゆゑハ猟師の欲るまゝ〳〵ども熊ハ猛く且智ありて得るハ易からぬ雪中の熊ハ皮も膽も常ハ倍ハ価ハ雪ハ穴居ハ冬ハ尋ね捜し猟師ども力を戮せて捕ハ種〻

の術ある事初編ゑ記せり たまゝ一熊を得るとも其倚ゑ價を
分もゑ利得薄しさるゆゑ雪中の熊ハ一人の力ゑてハ得事
難しとぞ○茲ゑ吾ゞ住近在ゑ后谷村といふあり此村の弥左
エ門といふ農夫老たる双親年頃のねゞひよまゝせ秋のそゝめ
信州善光寺へ参詣させけりさてある日用あるとて二里だゝり
の所へゆきたる留守隣家の者過て火を出さゝたちまち軒ゑ
うつりけるバ弥左エ門ゞ妻二人の小児をつれて逃去て命一ツを
助りたるのゝ家財ハのこらず目前の烟となりぬ弥左エ門ハ村ゑ
火災ありときゝて走飯りしゑ今朝出しゝ家い灰となりてたゞ妻子の
无事をよろこぶのゝ外夫婦心正直にして親ゑも孝心ある者ゆゑ人こゝ
を憐みまづもゝらく我ゞ家ゑ居るゞゝゑて奬る冨農もあつて
けるゞつゝゝい奴僕の業をなりても恩ゑ報ゆるゞ双親飯り来りて

賜ハ城双て人の家ゑ在らんハ心も安からゞゝて諾す竊ゑ田地を分く質
入ゑしゝその金ゑて假ゑ家を作り親も飯ゑて住けり草を刈鎌をさゝ買
求るほゞなりけるバ火の為ゑ貧くなりしゑ家を焼る隣家へ對ひ
て一言の恨をいゝず交り親むこと常ゑそゝさりくりかくてその年も
くれて翌年の二月のもゞめ弥左エ門山ゑ入て薪を取りしゝ一のゝるさ
谷ゑ落る雪頽の雪の中ゑ人ハくしくしく黒き物有遥ゑこゝを視て
ゆしゝ人のなゞるゝゑうとゝ死しくるゆゑと辛ゞて谷ゑ下り見ゝと很き
バ稀有の大熊雪頽ゑ打敗ゝたるありけり此雪頽といふ事初編ゆも
くたくく記るゝまくく山ゑ積りくる雪二丈ゆもあまるゞ春の陽気下より
蒸て自然ゑ碎け落る事大盤石を轉しおとゝゝゞ如しゝゝゝゑ遇ゞ
人馬ハさらゝまり大木大石もうちおとさるさゝゝバ此熊もこゝゝゑうゝ
ゝゝくくるゆり弥ざゝゝゆんハよきゆものをくつけくくうゝと大ゑ悦びゆゝと

膽もとらんとおもひしが日も西に傾きしバ明日きたらんとて人の見
つけざる処に山刀にて熊を雪に埋めかくし心に目じるしおきて
家にかへり親にもかたりてよろこばせ次のあした皮を剥ぐべき用意をな
してかしこにいたりしに膽ハ常に倍して大なりしゆゑ弁当の面桶に入
れて持かへりしに人ありて皮と金一両膽を九両に買へり弥ざゑもん
おもはず十両の金を得て質入せし田地をもうけもどしそれより
僥幸ありてわづかの家なりしが家もあらたに作りたていぜんに倍して栄けり
弥左エ門が雪頽に熊を得たるハ金一釜を掘得たる孝子にも比すべ
く年頃の孝心を天のあはれみ玉ひしならんと人々賞しけりと交
谷鶯翁がかたりき

○雪頽の難

吾が住塩沢ハ下組六十八ケ村の郷元なれバ郷元を真り知る家にハ
古来の記録も残りし其旧記の中に元文五年庚申（今より百年まへ）二月廿
三日暁湯沢宿の枝村掘切村の后の山より雪頽不意に押落し
其響百雷の如く百姓彦右エ門浅右エ門の両家なだれにうたれ
家つぶれ彦右エ門并に馬一疋即死妻と嗣息ハ半死半生浅右エ門ハ
父子即死妻ハ梁の下に壓れて死にいたらず此時　御領主より彦
右エ門息へ米五俵浅右エ門妻へ米五俵賜し事を記しあり此魚
沼郡ハ大郡にて　会津侯御預りの地なり元文の昔も今も
御領内の人民を憐玉ふ事仰ぐべく尊むべしそのありがたさを
吾が后の世も示さんとて筆の序にしるせり近年ハ山家の人家を作る
に此雪頽を避て地を計るゆゑにその難まれなれども山道を往来する
時なだれにうたれて死するもの間ある事なり初編にもいへるが如く
○ホウラハ冬にあり雪頽ハ春にあり他国の人越後に来りて山

下を往来せざるホウラあぐまを用心まづ〳〵他国の人こゝに死し
たる石塔今も所〻にありおそるべし〳〵

○雪中の葬式

吾が国に雪吹といふハ猛風不意に起りて高山平原の雪を吹
散し〳〵その風四方にふきめぐり〳〵て寒雪百万の箭を飛ばす如く
寸隙の間をも許さゞるゆゑまゝ往来の人ハ通身雪に射
まゝて少時に半身雪に埋まゝて凍死する支まゝ〳〵もいつるゆゑ〳〵
此ふぶきハ晴天なれども俄におこり二日も三日も雪あゝ〳〵てふぶきする
事あり往来もこゝろ為にとまることあり此時に臨て死亡
せしもの雪あれのやむを待も程のあるものゆゑせんすべなく雪に
犯て棺を出す事あり施主いろゝもこのぶきに他人乃
困苦事見るもきのどくあり〳〵雪国に一ツの苦状といふべし我江

戸に逗留せ〳〵ろ旅宿のちろきあくりに死亡ありて葬式の具
嵐なるに宿の主もこゝに住とて雨具きび〳〵ゝ〳〵今日
の仏いとなる因果のそやかる嵐に値て人に難義をかゝる
なるべしいとても極楽〳〵ゆるまゝ〳〵あどつぶやきつゝ立いづるを見
て吾が国の雪吹に比ぶればいと安〳〵とおもふべし

○龍燈

筑紫のちぬ火とふハ古哥にもあまたよゝむ〳〵より今の名たくあま
祢く人のあるゆゑ我の巻さまく春暉が西遊記にもちぬ火を現
たりと詳にあるゼリ其ちぬ火とも世に竜燈のたぐひなるべし
我国浦原郡に鐙湾と云里言に湖東西一里半南北一里の湖水あり
毎年二月の中の午の日の夜酉の下刻より丑の刻頃まで水上に火数を
里人鐙湾の万燈と云ゝ多〳〵余が友人をこゝにをきしに

西遊記ふ有るつしの有るぬ火とおもひ　さまあり　近年湖水を北海へ
おとし新田とおりあ多湖中の万燈も今人家の億燈と為まり又我国の
八海山巓ふ八つの地あり依て山の名とす絶頂ふ八海大明神の社あり八月
朔日を縁日とし山まのわる人多し此夜ふかきして竜燈あり甚奇る所と見
多る人なとふおもて竜燈とふ名おれくハ春夏秋あり諸国ふある夏
諸書ふ有るくるを見ふいづれも海よりも出山よりもいでる
毎年甚日甚刻限定りある事甚奇異あり竜神より神仏へ供と云ば
普通の説なれどあふ孫き竜燈の談ありふく竜燈を解べき説なし
バ姑く有るて好事家の茶話ふ供す
我国頸城郡米山の禁ま医王山米山寺ハ和同年中の創草あり山ふ
ふ薬師堂あり山中女人を禁ず此米山の腰を米山巓と云越後北海の驛
路あり此辺古跡多し余先年甚古跡を尋んとて下越後ふあるべし

時新道村の長飯塚知義の話ふ一年夏の頃雲のあふ村の者ども数へ
米山へのがれしふ薬師へ参詣の人山ふ有るためふ御鉢とふ所ふ小屋二ツあり
我の小屋へ一宿ふ是日六月十二日ふて此御鉢とふ所へ竜燈のある夜あり
おりひまりけるして竜燈をる事よとて人ふ有るをしふ西の刻とふ頃ふて
ともあるきさりあるまりしふ大なるハ手鞠の如く小なるハ雞卵の如し大小ふ此御
鉢とふ有るをさるして飛行ふる事あるひハ有るやうあるひハ有るそのさま
心あるて遊ぶが如し甚光りハ蛍火の色ふ似りつよくも光りよわくもひるあり
天井ひめぐりてちぐりくもとぶまるハ有るくあまるありてかぞへどもちでめるり小や
の入口を閉人くひをまりて覗みるへ人ふ有りもちゆるやうふて大小の竜燈
二ツ三ツ小屋のまへ七八間さきふもてきさりしを加ぶひりふすしこれ形ち鳥の
やうふ見えて光りハ咽の下より旋つやうあり狂近くよりがかちもたしふ
視るぞけんとおりひしふちのくハよりぶして中ふ飛めぐるり此夜ハ山中

み一宿の心得あるべが心用の為ふ筒をも持ぜーみ手たるの上手たるも若あるべが光りを的よくくんとまるを老人ありてやはまてとおーくめあるろたゝあり此竜燈ハ竜神より薬師如来(さけあるあり罰あらうと叱りる声ハ竜燈ハおどろきくるやうゆてたるう遠く乖さしと知義語るべき

○芭蕉翁ゞ遺墨

おゝて越後の雪とよくくう哥あるべとるもども越雪と目前ーくよくくるハまるもあり　西行ゞ山家集頓阿ゞ草菴集ゆも越後の雪の哥あ〜　坎韻僧くもも越地の雪ハちくさるゞ〜　俊頼朝臣ゆ降雪ゆ谷の併うづもれて梢で冬の山路あうるる　これらハ実ゆ越後の雪の真景ゆるべどもあるん越後ゆきくう玉ひーゆいあるず俗よいく哥人ハ居あゞら名所をたるあり　伊達政宗卿の御哥よさくべとも誰うハ越ん関の戸も降うづめくる雪の夕暮　又

ふつゞくうるる道絶て雪ゆ隣のちくき山里　坎君ハ御名たゝのき哥仙あておゝ〜まるゆ〜ゆるかるめでくきき御哥もありて人の口碑ゆもつくくゆ雪の実境をゆくく玉ひーハちゆ〜めて御国も深雪るるべハゆ〜芭蕉翁ゞ奥ゆ行脚のくるさ越後ゆ入り新潟ゆて海ゆ降る雨や恋〜きうき身宿　寺泊ゆて　荒海や佐渡く横くくゆ天の川　こゝ夏秋の遊杖ゆて越後の雪と見ざる事必せり

さゝべ近来も越地ゆ遊ぶ文人墨客あまくあるべど秋のもるゆい くゝべハ雪をおそれて故郷(逃飯るゆる越雪の詩哥もあ〜紀行もあ〜　稀ゆハ他国の人越後ゆ雪中もるも文雅あるべい筆ゆのこす事あ〜　吾ゞ国三条の人崑崙山人北越奇談を出板せーゞ(六巻絵入る本文化八年板)　一辞半言も雪の事をちくさゞ今文運盛ゆーて新板湧うゞくくあるべども日本第一の大雪あるる越後の雪を記くくる書

芭蕉翁訪凍雲図

涼雲を
たゝん秋て
菓樹千
いつ迄り
ものを
枕
芭蕉

ふ〜ゆゑよ吾が不学をも忘れて越雪の奇状奇蹟を記す
後来よ示し且越地ふ係りし事ハ姑く載て好事の話柄とす
さて元禄の頃高田の御城下ふ細井昌庵といひし医師ありけり
一ふ青庵といひ俳諧を善して号を凍雲といひ〜せたせ翁
奥羽あんぎやの〜つ凍雲をたづねて「菜棚よいづまの花を草枕」と
発句ちけるバ凍雲ときあへず「萩のすゞまを巻あげる月」其時の
たせ翁が肉筆二枚ありて一枚ハ昏損と覚し〜く淡墨をゆて一抹乃
痕あり二枚とゆふ昌庵主の家ふつ〜を后ふ本昏ハ同所の親族
三崎屋吉兵衛の家ふつ〜昏損のハ同所五智如来の寺ふのこるりちろ
るふ文政のころ其地の　邦君風雅をこの〜王ひ〜ゆゑかの二枚持主よ
り奉りけるバ吉兵ヱ（常信の三幅対よ白銀五枚りの寺）もあつき賜あ
りて今二枚とゆふ　御蔵とゆふ　友人葵亭翁がものがたり〜つ

葵亭翁ハ蒲原郡加茂明神の修験宮本院名ハ義方吐醋と号し
又無方斎と別号ゆ隠居〜て葵亭といふ和洪の博識北越の風人
ゆり芭蕉ゞ件の句ものふ見えざるもいろせり
百樹曰芭蕉居士ハ寛永廿年伊賀の上野藤堂新七郎殿の
藩よ生る次男寛文六年歳廿四ゆ〜て仕絆を辞し京ふいで〜季吟
翁の門ふ入り昏を北向雲竹よ学ふたゞめ宗房といひ季吟翁の
句集のものゆを宗房とあり延宝のすゑちゞめて江戸ふ来り杉風が
家ふ寄小田原町鯉屋藤左ヱ門剃髪〜て素宣といひ桃青ハ后の名ゆり
芭蕉とハ草庵ふ芭蕉を植〜ゆゑ人よりよびくる名の后ふ自号
ふよゞり翁の作ふ芭蕉と移辞といふ文ありその終りの辞ふ「たまく
花さくも花ゆゑあらず草太けもども斧ふあらずかの山中不材の
類木ゆたゞ〜てその性よ〜僧懐素ハ是ふ筆を走らし張横渠を

新葉を見て修学の力とせしとあり予その二ツをとらずたゞ此蔭より遊びて風雨ふ破を易きを愛せ「芭蕉野分して盥ふ雨をきく夜」此邑蕉庵の旧蹟ハ深川清澄町万年橋の南詰ふ対ひる今或侯の庭中ふ在り古池の趾今ふ存せりとぞ（余芭蕉年表一名芭蕉年代記とゝふ）（ものを作ち昏肆刺とゝもゝ考証未定ゆゑよ刺とゆゝず）翁身を世外ふ置て四方ふ雲水〳〵江戸ふ趾をとゞめず終ふハ元禄七年甲戌十月十二日「旅ふ病て夢ハ枯野をかけ廻る」の一句をのこして浪花の花屋ゞ旅囱ふ客死せり是挙世の知る処あり翁ゞ臨終の事ハ江州粟津の義仲寺ふのこゝる榎本其角ゞ芭蕉終焉記ふ目前視るゞ如くふ記せり此記を視るふ翁いとゝう菌毒ふあらて痢とあり九月晦日より病よ臥僅よ十二日ふして下泉せり此時病床の下よあり七門人ふ木節（翁ふ薬をあゝ〳〵たる医なり）ふ去来ふ惟然ふ一心ふ乎ふ之道ふ支考ふ呑舟ふ丈草ふ乙州ふ伽香以上十人あり其角ハ此時和泉の淡の輪といふ所ふあり〳〵翁大坂ふきて病ともなりて十日ふ来りて十二日の臨終ふ遇て奇遇といふべし（以上終焉記を摘要せり）其角ゞ終焉記の文中ふ（此記義仲寺ふ施板ありて人のもふ俳人ハうゝ〳〵ゝ呑あり）『義仲寺ふて葬礼義信を尽し京大坂大津膳所の連衆彼官従者まで此翁の情を慕ふて招ざるふ馳来る者三百余人あり浄衣その外智月と（百樹云大津の米屋の母翁の門人）乙州ゞ妻縫たて着せまゐらす』又曰『三千餘人の門葉辺遠ひとゝふ合信する因と縁とゝの不可思議いかゝも勘破ぞゝ〳〵』百樹おもへらく孔子よ三千の門人ありて門ふ十哲をいゞす芭蕉よ二千の門葉ありて庵ふ十哲とよぶ門人ありし至善の大道と遊藝の小技と尊卑の雲泥ハ論よおよばざるとも孔子七十ふして魯国の城北泗上ふ葬て心喪と服する弟

子三千人芭蕉五十二ヤして粟津の義仲寺ふ葬る時招ざるふ来る者三百餘人是以人ふ師さるの徳あり〳〵をおもひ〳〵

盖芭蕉の盆石ゞ孔夫子の泰山ふ似るをとゝまり芭蕉曽駐俭の風輕薄の習少〳〵もあり〳〵ハ吟咏文章ゆてもちる共翁ハ其角ゞいひ〳〵ごとく〳〵人の推慕する事今ふ於も不可思議の奇人ありされば一句一章とゝども人こゝ找句碑ふ作りて不朽ふ傳ふる事今猶句碑のあらざる国あ〳〵吟海の幸祥詞林の福禎文藻ふ於て共人の右ふ出る者あ〳〵さゝバ本文ゆもいるまぢ〳〵かりそあふいひもて〳〵る茶摘の一句の墨痕も百四十余年の后ふいたりて文改の頃白銀の光りをゝもつぞ〳〵論外不思議とゝゞ〳〵

蜀山先生嘗謂予曰凡文墨とゝて世ふ遊ぶ者再ハ論せず死後ゝ〳〵り一字一百銭ふ当らる〳〵身ゝ〳〵ハ文雅幸福足〳〵とゝて

まゝき共先生ハ今其幸福あり一字一百銭ふ当らる〳〵事嗟乎難れ

○さてまゝ芭蕉ゞ行扶小傳ハ諸昏ふ散見〳〵て普く人の知る所ありまゝとも翁の容見い挙世知る人あゞ〳〵ゞさゝゞ爰ふ一証を得ゝるゆゑ共雪譜ふ記載〳〵て后来ふ示ゝいかゝる頃談も世ふ埋寛せん事のを〳〵けゝゞいざ狀ゞとて雪ふ摶す筆の老婆心あり○まゝふ二代目市川團十郎初代段十郎（のち團ふ改む）の俳号を嗣で才牛とゝく后ふ指蓬とあらたむ（元文元年あり）共柏蓬ハ。正徳。享保。元文○寛保ゝ盛ふ歴〳〵る名人あり妻をおきいとゝい俳名を聟仙とゝふ夫婦ともふ俳諧と能〳〵文雅を好り共柏蓬ゞ日記のやうふ昏残〳〵たる老の楽とゝふ随筆あり（二百四十余年の自筆あり）嘗梱外（山さゝゞし）を狂哥坐真顔翁珠昏ふゝゞゞ懇望〳〵てかの家より借りる時余も亡兄ともふ読〳〵ことありきそのあ〳〵ふ芝居土用やきそのの

うち柏莚一蝶ゞ引船の絵の小屏風と風入をする旁ゝ人
参をきざゝもあぐら妖繪ふむかをおもいぐゝして独言いひる
を記〳〵る文ふ「我を幼年の頃たゞめて吉原を見る時黒
羽二重ふ三升の紋つけるふり袖を着て右の手を一蝶ゆひろ
を左りと其角ゆゑをもて日本堤を往〳〵事今ふ忘ず妖ふう
い世ふ名をひゞうせられど今ハなき人ゆゑ我い幸ふ世ふありて名
もまゝ頗る聞えゝり中略今日小川破笠老まゐらるむゝの
たなゝ〳〵せらもとゝるゆゝふ芭蕉翁ハゆゝおそうもたゞゆゝふそていろ白
く小兵ゆゝり常ふ茶のつゝむぎの羽織をきらもと嵐雪ふ其角ゞ所
〳〵いそゝるゞよとゆのちゞゝふいそもゝ〳〵とゝゝらまたり」芝文を兵
を今目前ふ見るゞ如〳〵

翁の門人椎然ゞ作ゝらふ公翁の肖像あるひい画幅の肖像世ふ流傳ゆるゆゝ世説とあゝせ視る

小川破笠俗称平助壮年の頃放蕩ふて嵐雪と倶ふ俗称服部彦兵衛

其角ゞ堀江町の居ふ食客たゝ〳〵事件の老の樂又破笠ゞ
自記ふも見ゆ破笠一ふ笠翁まゝ印觀子梦中庵等の号あゝ
絵を一蝶ふ学び俳諧ハ其角を師ゝて余ゞ藏ゆる画幅ふ延享
三年丙寅仲春梦中庵笠翁八十有四華とあり描金を善〳〵て
人の粕をゆめず別ふ一趣の奇工を為す破笠細工ゝて今ふ賞
せらる吉原の七月創て機燈と作りて今ふ其余波を残り傳詳
ゆゝもゞゝもさのゝいとてゆゝせり

○化石溪

東游記ふ越前国大野領の山中ふ化石溪あり何物ゆても半月あ
るひハ一ケ月妖溪ふ浸〳〵おけばかゝゝず石ふ化す器物いさらゆゝり紙
一束藁ゆてむもびゝるゞ石ふ化ゝるを見ゝゝとゝらせり我ゞ越後ゆも
化石溪あり魚沼郡小出の在羽川ゝゝふ溪水一蚕の腐ゝるゝ流〳〵ゝ

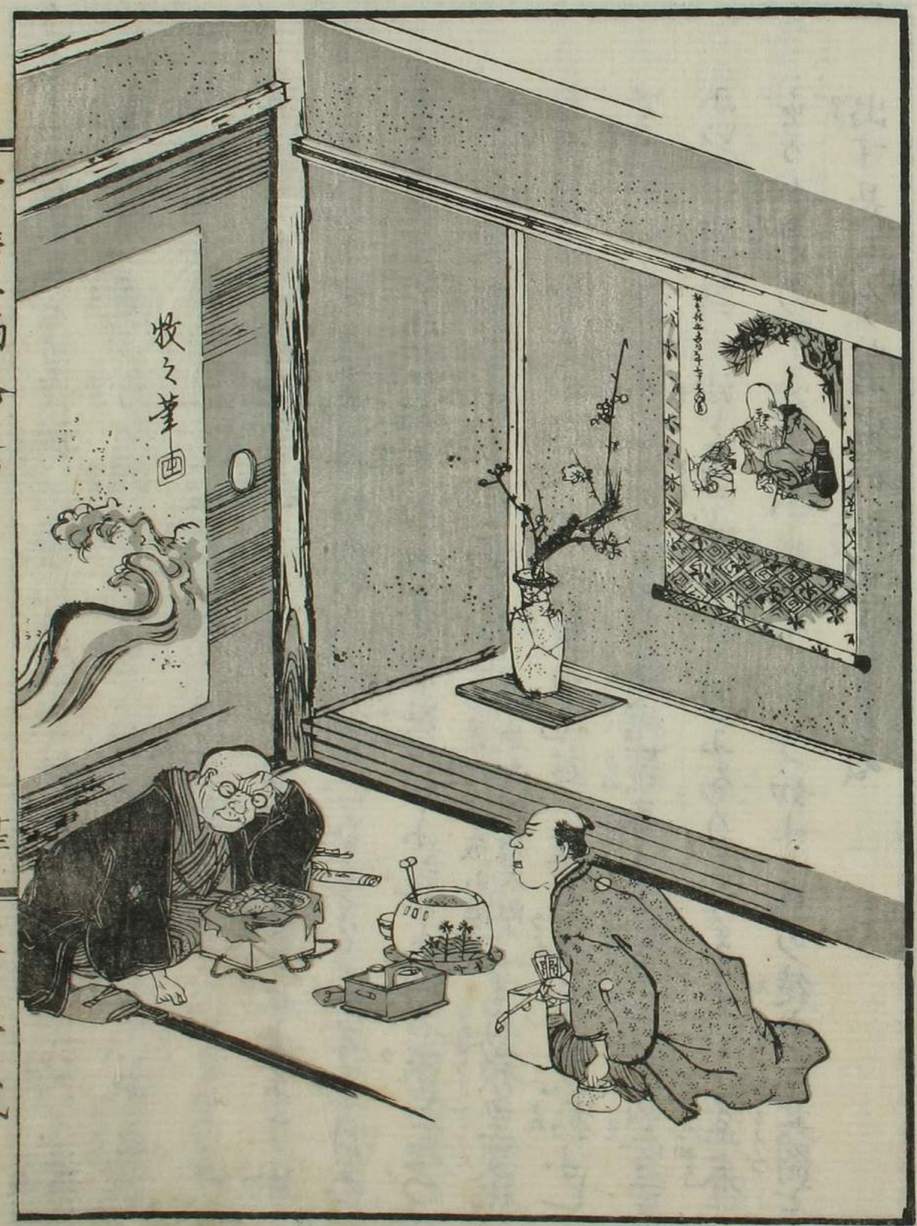
一夜ゐ〜て石ゐ化〜たり〜友人菱亭翁がくらまきかの大野領の化石溪ハ東游記の為ゐ名高けまども我ゥ国の化石溪ハ世ゐそられず又近江の石亭ゥ雲根志変化の部ゐ編人あり語云越後國大飯郡ゐ寒水滝といふあり此処深山幽谷ゐ〜て冱寒の地なる此滝坪〜万物を投こめゐ〜ゐ百日を過ず〜て石ゐ化すとぞ滝坪の近所ゐて諸木の枝葉又ハ木の実その外生類までも石ゐ化るを得るとぞ予去る頃此滝の石を取よせ〜人あ〜て見るに常の石ゐあ〜ぢ全脉鐘乳あり木の葉あど石中ゐふくむ則石あり雲林石譜ゐいふ鐘乳の搏化〜て石ゐなるゐらん云云牧之案るゐ越後ゐ大飯郡ゐ〜又寒水滝の名もきゐず人あり語るとあまゐ傳聞の誤ゐ〜ぢ〜蓋北越奇談ゐ会津ゐ隣る駒ゥ岳の深谷ゐ入ると三里ゐ〜て化石溪と名付る処あり虫羽草木といひども

溪ゐ入りて一年と暦ゐ〜ゐ化〜て石とゐる其川甚苦寒ゐ〜て夏も渉〜ぢ〜ぢ如〜又蘓門岳の北下田郷の深谷ゐも化石溪あり云〜雲根志の説ハこれらの所を聞誤〜るゐならん

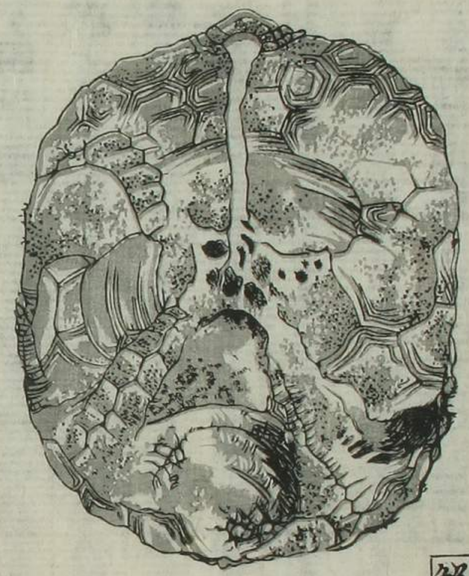
○亀の化石

吾ゥ同郡岡の町の旧家村山藤左エ門ハ余ゥ壻の兄ゐり此家ハ先代より秘蔵ゐる亀の化石あり傳て〜ふ近き山間の土中ゐ〜を掘得て〜ふ実ゐ化石の奇異ゐり茲ゐ図を挙て弄石家の鑒を俟

百樹曰件の図ゐ視るゐ常ゐある亀とハ形状少〜〜異ゐるゆゑゐ依て案るゐ本草ゐ所謂秦亀一名筮亀あるひハ山亀といひ俗ゐ石亀とゐふ物ゐあ〜ん秦亀ハ山中ゐ居るものゆゑゐ呼で山亀とゐふ春夏ハ溪水ゐ遊び秋冬ハ山ゐ蔵る極て長寿ゐる亀ハ是ゐ〜とぞ又筮亀と一名ゐるハ周易ゐ亀を焼て占ひ



甲之図



蟹之化石

堅 曲尺五寸五分
横 四寸五分 厚二寸六分
重 八百目

腹之図

腹之図

しかも亀ありとて件の亀の化石本草家の鑒定を得て秦亀ふ亀ふ〳〵ば一層の珍を増し〳〵山ふて拾得ることあるべ秦亀ふちなきやうなり化石といふものあまた見しふ多ハ小きものそあるひハいまた体全も稀ふ図の化石ハ体全く且大なり珍とすべし〳〵。余先年俗ふいふ大和めぐりをしるをり半月あまり京ふあそび旧友の画家春琴子ふ就て諸名家をたづね〳〵時鴻儒の聞高き頼先生名襄字子成山陽と号通称頼徳太郎も訪ひ坐談化石の事ふおよび先生余ふ蟹の化石一枚を恵その色枯ずして生ゞ如く堅硬ことハ石ふり潛確類昏又本草三才図会等ふいへる石蟹泥沙と倶ふ化して石ふなりしるあるべし〳〵盆養もる石菖の下ふおのふ水中ふ動ゞ如し〳〵亀の徒者ふ其図と出す是も今ハ名家の形見となりぬ

○夜光王

雲根志灵異の部ふ曰予が隣家ふ壮勇の者あり儀兵衛といふ或時田上谷といふ山中ふ行て夜更て飯るふむかうある山の澗底より青く光り虹の如く昇てまるハ天ふ接る此男勇漢なれハ元二元三ふ草木を分けて山と越谷をにくりてかの根元をさぐりるふたゞ何の異る事もなき石ふりひろひとりて背ふ負ひ飯るふ道もすがら光るまゝと前の如し〳〵甚ゞ夜道の労をたすけり暁の頃我ゞ家ふ着ぬ件の石を軒の外ふ直し〳〵置朝飯ふでもくめて彼の石を見んとするふ石ふ〳〵いろふせ〳〵事やらんとさゞめくふたづみもとむれども行方をもとずとなん又本国甲賀郡石原潮音寺和尚のかのぐらふ近里の農人畑を拵居〳〵ふ拳たゞある石をりいぶせり此石常の石よりハ甚ゞうつくしくよろて取りかゝりぬ夜ふ入りて光ること流星の

如一友のいふ是ハ灵石あり人の持ものふあらず家ふあるバ必災あるべ
しとやくおやじてもつぐーと豆をきて斧ともつて折碎くと竹
やぶの中にてこゝ其夜竹林一面ふ光る事数万の蛍火の如し翌
朝近里の人きつゝ〳〵集り来り竹林をたづねるふ中ーのゝぐ
までも一石も有る事あり又筑后国上妻郡の人用ありて夜中近
村へ行よ一ツの小川あり かちゝこゝ せゝふるふゆらん光る物あり拾ひ
とりてこゝとバ小石あり翌日さる方へ献ずもぐ〳〵くし笑こゝとぞ以上
一条全文是等ハ他国の事あり我が越后ふも夜光の玉のあゝ事あり
新発田より蒲原郡東北加治とゝふ所と中条といふ所の間路の傍田
の中よ庚申塚あり此塚の上ふ大さ一尺立寸だゝりの四石と鎮し
てこれを礼る此石その先農夫屋の后の竹林を掃除して竹の根
もぐ掘るとてかの石一ツを掘得こゝその色青くありて黑く甚ざ

あらゝあり農夫こゝをもつて藁をこゝつ盤ゝふす其夜妻庭ふ
出ゝふ燦狀ゝて光る物あり妻妖怪ゝとして驚叫家主壮夫
三五人を伴ひ来りて光る物を打ふ石あり皆もつて怪ゝ石と竹
林ふ捨つその石夜毎ふ光りあり村人おそれて夜行ものふ依て
此石を庚申塚ふ祭り上ふ泥土を塗て光をかくす今猶苔むして
あり好事の人この石をもとめ村人崇あらん虞を懼てゆるさゞるぞ
又駒ゝ岳の麓大湯村と杼尾村の間を流るゝ渓川を佐奈志川と
いふひゝせ渇水せ一頃水中ふ一点の光あり蛍の水よあるゝ如し
数日処を移さず一日暴雨よ水増て光りゝ物所を失ふ后四五町川
下よ光りある物蛍火の如ー此地山中ゝまゝバ村夫等昏愚ゆゝく
夜光の玉ある事をもゝず敢てたづねもとむる者もあるゝふ其秋
の洪水よ夜光の玉ふゝびもぐるとて所在を失ひゝとぞ以上北越奇談の説偖

茲ふ夜光珠の実事あり我文政二年卯の春下越後を歴遊せしとき三嶋郡ふ入り伊弥彦明神を拜旧知識あるまゝバ高橋光則翁を尋しふ翁大ふよろこびて一宿を許しぬ此翁和哥を善し且好古の癖ありて卓達の人あり雅談湧ぐ如くおゆゝず節をとゞめ事四五日あり一夕翁の語りけるい今より四五十年以前吉田の三島郡の内ふ在りを大島川とゝふ溪川ふ夜ゝ光りものありて人怖て近づくものなゝしふ此川の近所ふ冨長村といふありもくふ鍛冶の兄弟ありひとりの母と養ふ家最貧し此兄弟剛気なるものゆゑかの光り物を見きらめゆ妖怪あるゝバ退治して村のものどもゞ肝とむしゞんとてある夜兄弟かゝふいとゝしふをゝしも秋の頃水もまさり川面をゝるふ月暗くしてたゞ水の音ときくのゝ両人炬をゝりてゝゝてゝゝをとゝるふ光るものゝちらふくまゝ怪しむゞきをゝずさて い人のゝゝハ空言あゝんいぎとて飯らんとゝるゝふ水上俄ふ光明を放つをゝやとて両人衣服を脱ぎて水ふ飛入り泳ぎよりて光る物を探りゝるふくゝ枕石ありこゝを取得く家ふ飯りまづ灶の下よ置しふ光り一室を照せりもゝぐくのよし母ふかゝりけゝバ不思議の宝を得ゝとて親子よろこび近隣よりも来りゝるをあゝしゞかのもらぬ者どもゝゞ趙璧隋珠ともおもゝゞうち過ゝかゝて后弟別家をする時家の物ニツふ分ちて弟ふちんや母のゝひしふ弟ハ家財を望まで光る石を持去んとゝゝ兄がいとく光る石を拾ひ得しハ我ゞ企あり汝ハ我ゞ力と助しのゝ為ふ光る石ハ親の譲ふあらず兄ゞ物あり家財を分あゝバおやのゆづりとそゝろへけゝとゝふまゞゞ弟いふゝあの石ハおゝゞのあゝいんとゝれバゆん身ハ光る石を拾んとの企あゝず妖物と退治せんとて川い

たりもん身よりハ我先よ川へ飛いり光りものを探りあてゝかづき
あげゝも我あり志るゝをびおれゞが記ろひゝ拙持さらんふるゆゝあらんいや
く扶兄ゞものもろ弟ゞのもろゝと口論やまゞで終ゆふつゝあひもちの
ひゝを毋やりくゝまれゝもづめもちゝぶ光る石を二ツふ破りて分つゞゝと
いふ弟さらゞて明玉をもろいゞゝ鍛冶もる鑽の上ふのせ鎚をゆて
力ゆまりゝせて打ゝをゞをゝむゞゝ明玉碎破内ふ白玉を発ゝゞゝ志も
碎け水ありて四方へ飛散ゝり其夜水のこゝゝゝ処光り暉く事蛍の群
ゝゝゞ如くもりゝふ二三夜やゝてその光りも消失けりとでいふ頑愚の
手ふありゝといひあゝ稀世の宝玉鄙人の一槌をうけて亡ひゝゝハ
玉も人も倶ふ不幸ゝゝふゞゝと語らゆゝき牧之案よ橋春暉ゞ著る
北囸瑣談後編の二藏石家の事をゝ條ふ曰江州山田の浦の木之内古
繁伊勢の山中甚作大坂の加嶋屋源太兵卫其外ゆも三都の中の

好事家侯國の逸人藏石ふ名の高き人近年駸ゝ余も諸家の
奇石を見ゝに皆一家の藏る処三千五千種ふいゝる五日十日の
日を尽ゝてやゝゝ眼をゝる支を得るふいゝるその多き中ふ
も格別ふ目をおどろすもゞの珎奇の物ハ无りのあり加嶋屋
源太兵卫ものゝゝふ过ゝ年北国より人ありて拳の大さ乃
夜光の玉ありよく一室を照すよき價あゝゝ賣んといひゝうゞ
即座ふ其人よ托ゝて曰其玉求たゝ暗夜ゆその玉の入りる箱
の内ゞゝ白きやゝふ見えもゞ金五十両ふりとむゞゝ又その玉
ゆゝ闇夜ふ大ある文字一字ゆても読えゝもちゞ金百両ゆすむ
ゞゝ又昏狀よむゞゝ三百金いよゝ一室をてらさゞ五ゞ
身上のこゝゝずの力を尽ゝて求むゞゝ媒ゝて玉りるゞゝと
いひゝゞゝもちゆの便もゆゝやゝぬ空言ゆてありしと思る

云云　按文段ハ天明年中藏石の世ふ流行たる頃加嶋屋が話を
そのまゝふ春暉が后よりたるゝるゞしさて又余がかの鍛冶屋
が玉のことゝをきゝしハ文政二年の春あり今より四五十年以前
とあまゝ鍛冶が玉を碎きたるハ安永のすゑゝ天明のたゞめ
あるゞし然りとせれバ藏石の流行る頃をまゝいかのゝしまやが
話ふ北國の人一室ふてらす玉のゝりものあるしとゝひしハ我が国の
縮商人あゝぶかぢやの玉の夷をきゝつゝく商ひ口をいひしわたり
らもすゝるふ玉ハくぶきしゝときゝてかゞまや答へざりしゆや
あらん卞和が玉も楚王を得ゝまゞこて世ふもいでゝまゝ右ふのせ
たる夜光の話五ツあり三ツハ我が越後ふありし事なりいづもも
世ふいでず嗟乎惜むゞしゝ
百樹曰五雜組物の部ふ鍛冶屋がもふ類せる夷あり

明の万曆の初閩中連江ゝの所の人蛤を剖て玉を得ゝまゝ
ゞも不識ゝまゝを京る珠釜の中に在て跳躍して定ず火
光天ふ燭里人火事ゝあゝんと驚き来りてゝまゝ救ふ玉と高
ゝるものゝゝのゆゑと聞て釜の蓋と啓て視ゝハ已ふ玉ハ半枯り
其珠徑一寸許欧真ふ夜光明月の珠あり俗子ふ厄せらゝまゝる
事悲夫ゝ記せり又曰五雜組魏の恵王が徑寸の珠前後車
千照ゝ十二乗の物むゝの事今天府ふも夜光珠ふもし
と明人謝肇淛が五雜組ふいゝり。神異記。洞冥記ふも夜光
珠の支見えゝまゝども孟浪ふ属す古今注ふハまゞまゝて太ゝる
鯨の眼ハ夜光珠をゝるとゝいゝり卞和が玉も剖之中果有玉とい
ハゞ石中ふ玉を孕たる事鍛冶ゝ碎ゝる玉卞和が玉ふ類せるゝ
趙の恵王が夜光の玉を秦の昭王が城十五と以て易んとゝひしハ

加嶌屋が北国の明王を身上尽しして買んと約せしが類せり
さて又癸辛雑識続集巻下に機婦糸を水にひたしておきたる
に夜中白く大なる蜘蛛きたりてその水をのむに身に光りを
ましてかの婦人ねるを見て大におどろき雞籠を覆てこの蜘
蛛をとらへしに腹に夜光珠在ちき弾丸の如しと云るせり 此事
を前文に收之老人が引たる北越奇談玉の部に越後にあるし事にて
いざせりこの事癸辛雑識に少しもちがひなし癸辛雑識は唐本
にて且又容易に得がたき書なれば北越奇談の作者俗子の目に奇を
きらきんとてたくみたるよし越後の事にして かきくはへたるなるべし
癸辛雑識続集は都下にもまれに得がたけれ共本書は
見るべきにあらざるべし博識に傳聞あるべし

第卅九 又増一阿含経 第卅三。等法品

に轉輪聖王の徳によそなたりたる一尺六寸の夜光摩尼宝は彼国十二由旬を照すとあり文多けれどいあげず蓋一
由旬は異国の四十里なり十二由旬は日本道六十六里なり一尺
六寸の玉六十六里四方を照すは奇異といふべし 轉輪王此玉
と得て試に高き幢の頭に掌著けるに人民等玉の光りと
もに夜の明るがごとくなりひるのごとく家業をなしめらるると記
せり此事碩学の聞高きに了阿上人の話にてかの経を借
得て読しに夜光の玉の親玉なるべき

餅花

餅花は夜は鼠がよし 野山 一ふねづくりとは其角がまいのそばにふ
て江戸あたりの餅花は十二月餅搗の時もちをふくれ作り歳徳の神
棚にさしかけるよし 俳諧の季は冬とす我国の餅花は春なり正月十
四日までを大正月といひ十五日より廿日までを小正月といふ是我
里俗の習なりさて正月十三日十四日のうちに門松をかざり
を取て拂ひ 我国長岡にては正月七日に十四日までをいふ 餅花を作り大神
宮歳徳の神夷恵の〳〵餅花一枝づゝ神棚にさしかけその作り

岡夫得名玉図

やういとづ木やとふ木あるひハ川楊の枝をとりこもふ餅と
三角又ハ梅桜の花形ふ切る紙かの枝ふさ〳〵あるひハ團子と
もまゝこれを蚕玉とふ稲穂又ハ紙ふて作りこる金銭縮あ
きびとあどいちごのひ形を紙ふて作り農家ふてハ木とけづり
て鍬鋤のたぐひ農具と小さく作りてもちぐのの枝ふのくるまぐ
ておのゝ〳〵家業ふあづかるものゝひとゝ〳〵耕るこゝ〳〵その業
の福といのるの祝事あり〇もちぐふを作るハおわりこつきものゝ
手業あり祝ひとて男女ともちまゝつとて声よく田植哥とう
ふ歌こゝろとときけバ夏ごこひ〳〵く家の上こゝ雪のたやくきえよ
かゝとおもふも雪国の人情あり歌餅花ハ俳諧の古き季寄ふ
もいでこれバ二百年来諸国ふもあるハ勿論ありちぐろ江戸ふを
季ふよらず小児の手遊ふ作りあきまふときこつ

斎の神勧進

我ゞ塩沢近辺の風俗ふ正月十五日まゝ七八歳より十三四までの
男の童ども斎の神勧進とふ事をふすゝ冨家の童こゝ
ゝ杖ふすふ構木を上下より削り掛て鍬の形を作ることゝ三棒
とふふこゝとと三本大ふふさ〳〵上下とちふく〳〵童僕ふ一外ますをとこ
せ又ハひもありてくびかゝるあるその中へ五六寸だるの木を頭
だるり人形ふ作り目鼻とるぐき二つとりて女神男神とゝ女神
ハかゝらふ綿ときせ紙ふて作りこる衣服ふ紅ふて梅の花ふど
るゞく男神ふハ烏帽子をきこせ木をけづりろけて髪とす紙のい
ふこふ若松ふどるゞく女二ツ紙かの升の内ふ入き斎の神勧進こ
とよゞうあるく敢物の欲ふもあらず一四月まをびの一ツなり
こゝと二人のこふあらず児輩ふのくまる事ありこゝとふ与ふるものハ

切餅あるひハ銭もらふ又まづしきものゝこらづらハ五七人十人餘も黨
をなし茜木綿の頭巾にあさぎの下りをつけたるをかむりかの斗棒
を一本さしうの二神と柳たるに入れて首にかけ「さいの神くるぞん
銭でも金でもくれろく」とおほきくと門くとおしありく又まゆ
銭をなあくあるひハ濁り酒などのませ顔に墨をぬりてわらひど
よめくこれかならずまちるまねらいせなり又長岡のあたりにてハかの
斗棒のけづりかけの三尺ばかりあるに宝づくしなどゑがきたるをさし
て劝進するものハ小児にかぎらず大人のいやしきものゝわざなり劝進のこと
ばに「せなでもかねでもおいまきらいねんの春ハ娵でも聟でもとる
やうに泉のすくらぬくらふすッくらすまゝとおいまく」かく
して劝進の錢をあつめて斎の神を祭る入用とするなり　さいの神のまつり
下にしるす
又去年むこをよめをむかへたる家の門に未明よりわらべども

大勢あつまりかの斗棒をもつて門戸を敲きよめをだせむこをだせ
同音によばゝりたゝくこれを里俗の祝事とてまへいはる家にハなども
を入れて物をくれてまろうありかゝる俗習他国にもあるべし
○さて此事たるはあるき小どものなぐさみとのみおもひはべりしに
醒斎京傳翁が骨董集を読て本拠ある事を発明せり骨董集
上編下。粥の木の條に。粥杖。祝木。おつかけ棒といふ物前にいひし
斗棒に同じ京傳翁の説に粥の木とハ正月十五日粥を烹たる薪を
杖として子をもたぬ女のしりをうてば男子をうむといふ祝ひ事なり
とて。枕の草紙。狭衣。弁内侍の日記その外くさぐさの書を引て
上代の宮裏近古の市中粥杖の事を挙て考証甚詳なり今
我が郡においてハ斗棒ハ則いにしへの粥杖の遺風なる事を発明せり
我国にも祝木あるひハ御祝棒といふ所もありこれ七八百年前より

正月十五日は京傳翁が引まくる昏はかくもあらんそのの
引昏の中にも明人の作日本風土記にあるハ如何にも我国のふく
似たり然昏ハ今より三百年ばかりいぜんの日本の風俗を明人の
聞つたへて昏さるものなれバ今我国にハ小童のたぐひまれ
なる三百年ばかりさきの風俗遠境にもうつりのこりたるべし
京傳翁の引くる日本風土記巻の二時令の部にあり洪文の「但街道
郷村の児童年十五八九已上に及ぶ者各柳の枝を取り皮をそり
木刀に彫成し皮を以復外刀上に纏ひ用火焼黒め皮を
去り以黒白の花を分つ名づけて荷花蘭蜜と云ふ再荊棘の
條を取香花神前に插供次に集る各童手に木刀を執途に
隊伍凡有婚无子の婦木刀を将て遍身打之口に荷花蘭蜜
と含ふかくず此婦当年孕男を生我国にて児童等ゞ人の

門を手棒にたゝき嫩をだせ聟をだせとのゝしりたるハ右の風
土記の俗習の遺事なるべし
百樹案に件の風土記に再び荊棘の條を取り香花神前に插
とゝ云ハ餅花を神棚へ供ずる事を聞て粥杖の事と混錯
し記したるなるべし然りとも餅花も古き祝事なり
○齊の神の祭
吾が国正月十五日に齊の神のまつりといふ所謂左義長なり
唐土に爆竹といふ唐人除夜の詩に竹爆千門の眄燈狀万戸明なり
の句あるなり爆竹ハ大晦日にする事なり吾朝にハ正月十五日
清涼殿の御庭にて青竹を焼き正月の昏始に火を焼く
天に奉るの又ことして十八日にも又竹をかざり扇を結びつけ同
御庭にて燃し玉ふを祝事とせさせ玉ふ民間にもこれを学び

て正月十五日正月よりぐ〳〵たるもの、ゆあつまりて燃すこと左義長
とて昔よりする事ありこれを齊の神祭りといふも古き事ふ
て爆竹左義長の故事俳諧の季寄年浪草ふ諸昏と引く
くもく〳〵いつて。吾う郡中ふく小千谷といふ所ハ人家千戸て
あまる饒地ありそれもるんふ齊の神の齊あるひハ祭りも盛
大ありこれをまつるふその町ふおの〳〵毎年さごめの場
所あり〳〵その所の雪をふみこめ〳〵と三間だうりふ
周りたる高さ六七尺の四きさ壇を雪ふて作りこれふ二処
の上り階を作ることも雪ふてもるる里俗呼て城といふさて
壇の中央ふ杉のあまの木をたて〳〵柱〳〵正月ごろ〳〵るものあふ
くれを形〳〵この柱ふむすびつけ又ハ積あげて七五三をもつて上
よりむすびめぐらして蓑のごとくあまる〳〵 此頂ふ

大根注連といふものゝ左右ふ南る扇をつけ〳〵乖鳥の状と作る
つける壇の上ふハ席をまうけ〳〵神酒をそなへ此町の長るもの
礼服をつけ〳〵拜をなし〳〵所繁昌の幸福をいのる此事をまなびて
きまめたる火を四隅より移まて油滓をもて火のうつり易きやうて
なし〳〵やゝ燃〳〵燼〳〵ゝ肰あがる 此火あり餅とやきそこなふ病をのぞく
是則爆竹左義長あり他国ふてもある事あり或人の話ふ此事
百余年前まてハ江戸ふもありしが火災をもぐるたるふ禁下て
やうやうこそ。さて又おんべとふ物を作りてこの左義長ふ翳て
火をうつせ焼を祝事と守おんべハ御幣の訛言ありその作り
やうハ白紙と色〳〵ゝを数百枚つきあそせるを細き幣束
のやうふきりさげまるふ扇の地紙の形をきりのこしてこれを
数千あつめて青竹をもつて大小長短ハ作る家の意ふ

文溪堂藏

ゆゑ大なるを以て人ふ誇る棹の末ふひらき扇四ツをよせて扇
ふい家の紋をでいろ〳〵ろ〳〵ぐいろ紙を作るものゆゑ甚こ美事
ふり三月を作りてまづおのもく〳〵門へ建ふ事五月の幟のあ
つひふり十五日ふいたりてかの場所へかもき左義長ふかざ〳〵く
焼捨るを祝ひと〳〵慰とまて現る人群を形守ハ勿論事をもりてハ
こ〳〵の〳〵ふて喜酒の宴をひら〳〵こまこれ　國君盛德の餘澤
ふり他所ふも左義長あるもでもまづハ小千谷を盛大と守
百樹曰余京水をもこぐ〳〵越後ふ遊び〳〵時此小千谷の人
岩淵氏牧之老人親族ふり の家ふ節をこぐめこる事十四日八月あるじ
の嗣子廿四五許号を岩居こいふ昏をよくまて余ふ遇せ〳〵こと
甚篤〳〵小千谷ハ北越の一市会商家鱗次こて百物倫ざこと
〳〵の〳〵海を去る事僅ふ七里ゆゑふ魚類ふ乏〳〵からず

余塩沢ふあり〳〵ハ四十余日其地海ふ遠く〳〵て夏ハ海魚ふ
乏〳〵江戸者の口ふ魚肉の上らざり〳〵事四十余日小千谷
ふい〳〵り〳〵えじめて生鯛を喰せ〳〵ふ美味あり〳〵事いふこの
らず又鮭の時節ふ〳〵小千谷の前川ハ海ふ朝ゆるの大河ゆえ
ハ今捕〳〵をもぐふ庖丁ふて味ひ江戸ふまさまり一日鮭とてん
ぷらこふ物ふ〳〵ていぐせり余岩居ふむこひこまこふ地ふ〳〵ふ
名を何〳〵ふぐぞと問ひ〳〵ふ岩居これハテンプラとこふ我
こ〳〵ろ此物の名義暁〳〵かぐ〳〵古老ふたづねこれどもこゆる人
さらふ〳〵先生の説をきゝんとこふ余答てまづ食終てテンプ
ラの来由を語〳〵こふ鮭のてんぷ〳〵と飽まぐふ喰せり
○てんぷらの説。煉羊羹の起原
岩居ふ語て曰今をさる事五十余年前天明の初年大阪

わく家僕四五人もつくふぐの次男年廿七八ばかり利助とらふ
ものその身ようとしの二もうの哥妓をつれて山奔し江戸ふ下
り余ず家の京橋南街第一衒對ひの裏屋ふ住しふ一日事の序ふよりて
余ず家ふ来たりより常ふ出入して家僕のやうふ使ふできせ
けるふ花柳ふ身と果しくるものもあるもあるもろく立
ものあるくふ用を弁ずるものもあるもつき人ふ銭がなくして古兄
をたづねもとめてきある日利助いふやう江戸ふハ胡麻揚の辻
賣多し大阪ふてハつけあげとて魚肉のつけあげハうめきものふ
り江戸ふハいまだ魚のつけあげと夜ふせふる人ふ一ものこれを
うらんとおもふたのん亡兄京傳いそくそれハよきおもひつきありまず
うろむ〻して俄ふ調じさせしふいろふも美味ふり利助ふく
うるをを夜ふせの辻ふうらんふその行灯ふ魚のごまあげとも

さんもあやしやらまたうどうしあやしう名をつけしく主ふもとひ
けるとハ亡兄ものらくものあんして筆をとり天麩羅とかきく
うせうれハ利助不審の見をもつて天麩羅とハいふある所謂ふ
うとうふ亡兄ものうつ足下ハ今天竺浪人ありぶうと江戸
へきうて賣創る物ものふ天ふらもあり是ふ麩羅とうふ字と下し
うふ麩ハふ麦の粉ふてつくる羅ハうもものとよむ字ものふ麦
の粉のうすものをうけうとうふ支ありと戯言ものとけるとハ利助も
洒落うる男ものる天竺浪人のぶつきものる天ふくハおりうとと
大ふよろこびやどて妓店をいでて時あんどんと持きうて字と
こひしものる余ずをさがき時天麩羅と大昏して今しふ妓てん
ぷ〻一ツ四銭ふて毎夜うりきる〻程ありさて一月もたぎるう
ふ近辺所〻ふてんぷらの夜〻せので今ハ天麩羅の名油のぶく

世上ふ傳染ととり妖小千谷まで〳〵てんぷ〳〵の名をとゞ事一奇事とらつゞ〳〵されども京傳翁ゞ名づけ親よて利助ゞ賣ちゞめたりといひるる碩學鴻儒の大先生もちろく〳〵ずてんぷらの講釈ちろハ天下よ我一人ありとたゞもゞきけれバ岩居も手をうちて笑ひろう。○先年妖てんぷ〳〵の話を友人靜廬翁よ語りしふ翁ハ和漢の博達時鳴の聞人ありゝ翁曰事物紺珠明人黃一正作廿四巻夷食の部よてんぷ〳〵よ似ろる名ありきとゞそ〳〵ゆる其昏を借りてよ〳〵ふ。塔不刺とありて注よ。葱。椒。油。將酒と熬後より鴨或ハ雞。鵞とゞ慢火ゆて養熟とあり蟹とあゞ〳〵げよるゆ見えろ。○さて天麩羅の播布よ類せる事あり因よ記す。橘菴漫筆享和元年京の田仲宣作京師下河原よ佐野屋茄子漬とゞゆの享保年中長寄より上京〳〵て初て大碗十二の食卓と料理〳〵

弘めろる是京師浪花小食卓料理の初とゞやゝ茄子漬娘なんとゞいつるゆの老婆ゝありて近ゞまゞく存命せり則今の佐野屋祖ふり大坂ゆくなゝこれ食卓料理ありゝ弘りたれど野堂町の貴徳齋ゞ久〳〵つゞきとろゆ〳〵京師岩居ゞてんぷ〳〵をふるまゝ〳〵ろる夜ゆの友蓉岳来て搖布菓子余ゞ酒をこのまゞろると聞て家製ふつゝて煉羊羹を惠ぬ味ひ江戸ふ同じ余越後よねりゆうろうんと賞味〳〵て大よ感嘆〳〵岩居よ謂曰妖ねりゆうろうんも近年のものあり常のゆうろうんゆゝらぐゞ味ゆまきれり吾ゞをゝゆきゝろ常のゆうろうんゆゝらゆゝきゆの〳〵口ふハ入らぐり〳〵ふ江戸をゝる事遠き妖地ゆも出来逢のねりゆうかんあるハ実よ大平の德化ありとゞひ〳〵ふ蓉岳も昏画とよくし文事ゆありて好事ものゆれゞゝとゝきゝてひぐをまゝめ菓子ハ吾ゞ家産ゆねりゆうろうんと近来の

かのごとく由来と示し玉へるごとく余ごとうてのそく○寛政のそのころ江戸日本橋通一町目より町字を式部小路といふ所ふ喜太郎とて夫婦より稚いとをつくひ菓子屋と八見えぬ簡子造りかんぞんもかくぞ坎喜太郎いせんハ　貴重の御菓子を調進もとる家の菓子杜氏あるより奉公をもあてまつふ住し極製の菓子ぞうをせいして茶人又八富家のこゝあきまゐりさて坎者が工夫とてちゞめて煉羊羹と名づけてうりけるふ羊羹煉字八羊肝ある事秘苑日録ふいと喜太郎がねりやうかんとて人こめづらしがりてもてもあそれども一人一ふもてせいもとめるけふいうきらしたりとてつひの重箱空しくうる事多くあること余が目前もとる所あるかくて一二年の間ふ菓子や二軒ゆく喜太郎をまゐてねりやうかんとせいしそんめづらしかりしふ今八江戸の菓子やいきらあり追こ弘り坎

小千谷ふもあるとば坎国ふ市会とる所ふいうれらずあるべく又諸国ふもあるべしといひるとば蓑岳ふらして小倉美ふあり八重ふつくりんふのりあるとハまゐらずしてこれらの事雪譜の名ふハ似気ふもきゝ弁ふもとど本文小千谷のもゝ一ふおりいべしたれば人の話柄ふ記をりあ不近古食類の起原さゐべくあれど余が食物沿革考小上古より挙てもるべたまべこそふいわらせり

雪中の狼

初編ふのもるべたるべく我国の獣各ふいくまとば山を喩て雪渡国にさるこまと雪ふくくして食ふとべくきるふり春ふこまとべもとの棲ふのるさまとども雪ふまゐきこゑざるゆゑ食ふたら寸とふ〳〵夜中人家ふもとより犬あるどとり又人ふかる事ふありこまと山村の事あり里ふ人多きゆゑおとてきこらばるゆゑ雪中ふ

雪中狼入人家図

穴居するハ熊のあまり熊ハ手に山蟻をぬりつけこれをなめて穴居
の食とするよしいひつたふ○こゝに我郡中の山村に不祥のことなれバ地名人名をはぶく
まづしき農夫ありけるが老母と妻と十三の女子七ツの男子あり此
農夫性質篤實にしてよく母につかふひとゝせ二月のはじめ用あり
て二里ばかりの所へいでんとてこれ山道なり母いはく山みちなれバ用
心あり筒をもてといふ実にもとて鉄炮をもちゆきたりこれハ農業の
かたはら獵をもなすゆゑに国許の筒なりかくてそのまゝ時をう
つし一日も暮かゝる皈りくるとちゆうにて吾が村へ入らんとする雪の山蔭
に狼物を喰ふを見つけ矢頃にねらひよりて火蓋をきりしにあや
またずうちおとしぬちかよりこれハとみるに人の足なり農
夫大におどろききてハ村ちかくきたるならんと我家をきづかひ
狼ハそのまゝにしてはせかへりしに家のまへの雪の白きに血のく
れなゐをなかしたるよります〳〵おどろきはせかへりけれバ狼二疋逃
さりけりおそる〳〵入りみれバ母ハゐろりのまへにてうちくひちらされ片
足ハくひとられてなく妻ハ窓のもとに喰伏られあたりその
かたはらにいちごのあとなくきえちらしたるさまなり七ツの男の子ハ庭に
ありてかしらの半バ喰れてあり妻ハさすがにいきありて夫をみるよりなき
ながらんとしてちからおよバず狼がしわざなりといひてたえにけり農夫
ハゆめともうつゝともわきまへず鉄炮をもちて立あがりしがさるにても
娘ハいかにしてなきごゑもきこえずとよびけれバ床の下よりはひいで親にすがり
つきたるをあけておやもむすめをいだきてなきけり山家ハ
住居もさまかはりてゆかしたあるもの多けれバこれらの事をもしるものなき
ありけり農夫ハ時の间に六十の母三十の妻七ツの子を狼の
牙にかけつはじめ歯がみをなして口をしがり親子ふたりそこにうちふして

声をあげてあきおくり村のものやうくふきくつけきこう体
ととておとろきはけびくまびかひくあつまりきこう娘よやう
立ちたづねるまび肉をやぶりて狼三足をせいりーづるーい竈
ふ火をたきておうしやるもぐふ床の下へあげ入りぐきるみと母さま
とおとうあくてるんをきして念仏申ておうとうふくて共ありきると
いつぐき所へつげさらせ次の日のクぐまと棺一ツよ妻と童とをさ
め母の稽と二ツ野辺おくりとあーるるふ涙そそぐざるのいなくう
けるとでおやみまたうぐ筒をかてといひーあるる母の片足と雪の山
蔭ふくらひおる狼をうちおくして母の敵ハとうるれど二足とゆら
ちーハいふ口惜りうんこまとよりのち此農夫家と棄娘とつま
て順礼るでうちきるるれば人のよくまるたあーあり
百拇曰日本の狼ハ幻化事をきうす唐土の狼ハだけること

老狐ゆとふーす宋人李昉等ゞ太平廣記畜獸の部ふ四百四十二巻狼美
人ふ幻化て少年と通じあるひ人の母ゆだけて年七十ゆりて
ちーあてだけをあらそーて逃さり又ハ人の父を喰殺ーてその父
ゆだけて手を歴さるふ一日その子山ふ入りて来と採るふ狼き
たりて人の如く立其裾を銜ーるる爺ゆ狼の額と斫狼
ゆげ去りーゆる家ゆのつりーふ父の額よ傷の痕あるを視て狼
あることとさとりこまを殺ゆふ果ーて老狼あり親をころーさる
ゆる自縣ふくうて事の由をつげさる事ゆで。廣異記。宣室
志を引てゆるせり悍悪の事ふ狼の字をいふもの。殘忍ある
と豺狼の心とゆひ。声のおそろーきと狼声とゆひ。毒の甚ー
きを狼毒とゆひ。事の猥と狼と狼ー。反相ある人と狼顧。
義无と中山狼。恣ま食と狼食。病烈ーを狼疾とゆひ。狼

籍。狼戾。狼狽なゞ皆彼より譬て是をつまり文海披沙さまゞい
獣中最可悪ハ狼なり余竊に以為狼ハ狼中にて狼なるま
ども人にして狼なるハよく〳〵狼をのくすゆゑに狼なるを
こせずこもつゞるゝ狼毒をこゝる人あり人の狼なるを
狼の狼なるよりも可惧可悪篤実を外面とし奸慾を内
心ともすると狼者とゝひ娘と悍戾を狼老婆とゝふ巧ゝ狼心
をゝゝゝすとも識者の心眼ハ明鏡なりあゝ〳〵惧ざら
んや恥ざらんや

北越雪譜中巻終